

鬼女の高燈籠

——『奥州安達原』一つ家の段——

田川邦子

時空の彼方にあるものを感じするのに、独特の鋭敏な仕掛けを持つ『遠野物語』、そこには陸奥の叛逆者安倍貞任の伝説をいくつか残すとともに、その母親についても語っている。

早池峯は御影石の山なり。此山の小国に向きたる側に安倍ヶ城といふ岩あり。險しき崖の中途にありて、人などはとても行き得べき處に非ず。ここには今でも安倍貞任の母住めりと言伝ふ。雨の降るべき夕方など、岩屋の扉を鎖す音聞ゆと云ふ。小国、附馬牛の人々は、安倍ヶ城の錠の音がする、明日は雨ならんなど云ふ。

(65)

というのがそれである。

人も通わない険しい岩山の中程に棲む老女、その存在は彼女が「岩屋の扉を鎖す音」によつてのみ人々に感知されるとあれば、それはただ者とは思えない。

こういう不思議な話を読めばすぐに思い浮かぶのは、宝暦十二年(一七六二年)に大阪竹本座初演の浄瑠璃『奥州安達原』である。

四段目「一つ家の段」には、貞任宗任兄弟の母親岩手御前が鬼女になり登場する。二百年以上も昔のこの作品は、近松半二の修業時代

の習作といわれるが好評を博し、その後上演を重ねてきた。

人も通わない険わしい岩山に棲む老女は、鬼女か山姥か、朝敵になり敗北した勇士の母親についての思いは、『遠野物語』でも複雑微妙である。こういう云い伝えには、中央の大都會で成功し評判になった作品の内容が、何らかの影響を与えているのではないかと考えたくなるが、やはりそうではないだろう。辺境遠野の自然の中に生活する人々が、遠い昔かつてこの地に活躍し、敗北した勇將を追憶するとき、岩城にとり残された母親の運命を同時に想像し、その運命の象徴を「岩屋の扉を鎖す音」に集約させて行くのは、まことに印象的である。ここには「鬼」の語はひと言もいわれていないが、この母親(老女)のたたままい、そして心の内をおし量るとき、「鬼」の全容が見えてくるのである。

一方半二は貞任宗任兄弟の母親を、安達原の黒塚伝説に名高い鬼に重ね合わせることで成功した。老母の化身鬼女は、前九年の役で朝廷側と戦つて、戦没した安倍頼時の妻岩手御前その人で、その心は文字通り、復讐の鬼に化しているという設定である。

自然にとり囲まれた遠野地方の、素朴ではあるが奥行き深い想

像力と、大都會の劇場作者の想像力が、異しくも同一方向を向いていることに、江戸という時代の厚味を思うのであるが、同時に敗北者の運命に託す日本人の共通の思いが、どういふものであるかを思ふこともできるわけである。

『遠野物語』にいう「岩屋の扉を鎖す音」というのは、「音」であることで無限の意味の広がりを内包するのであるが、半二の『奥州安達原』四段目で、この「扉の音」に匹敵するものは何であろうかと考えてみれば、それは鬼の「一つ家」の標識である「高燈籠」にちがいない。暗闇に閉ざされた広大な安達原の中の一点にすぎないが、舞台上でもこの燈籠は下手の側に、ことさら高い位置に定まり、観客の目を惹くようにしつらえられている。

〔行く先とても定まらぬ當無し旅に行付次第。安達が原の高燈籠。心便りに辿り着き

と、伊駒之助と恋絹夫婦が長旅の途上宿を借りそこね、広大な安達が原に迷い込んだとき、まず目に入るのは彼方の高燈籠の灯の光。〕
「何の案じる事がある。氣遣ひしやんな。高燈籠があるから。」

家がなうては叶わぬ管」
と、「一つ家」の高燈籠を目ざし、宿を求むべく道を急ぐのは自然の成り行きであった。作者はこの燈籠に前もって観客の注意を引くうとしてか、老母（鬼）が薄暮の中に燈籠を下し、灯を点じる一場面を用意している。

志賀崎伊駒之助は八幡太郎義家の家臣であり、その恋人で後には妻となる恋絹は、安倍頼時の遺児である。敵味方の境界をのり越えたこの恋愛は、本来は成り立たないものであるが、義家の寛仁と明察により、朝敵安倍一族の動向を探る使命を負わされ、なかば追放

という形で、陸奥をさして二人は放浪の旅に出たのである。

ここで問題になるのは恋絹という女性であろう。幼時父親時に死別し、一族没落の中で遊女に身を落したというのが彼女の前歴である。つらい半生を生きるなかで、彼女は女の幸福とは何かを、明確に把み得たというべきか、恋に命を賭ける女になりきっている。

「エエ死なしやんとしたと様も聞えぬ。兄様も兄様達。よいかげんに朝敵もやめにしたがよい。お前の様な男（恋人の伊駒之助のこと）と敵味方になる様な鈍な軍があるものか。私が縁の邪魔になる兄様達。こつちから縁切るほどにコレ堪忍して下さい」

とはまことに過激な科白で、状況を度外視する女の自由と自己主張、生命感覚の完全解放をこの内に認めることはできるにしても、浄瑠璃劇においては、これこそ不吉な運命の前兆、予告に他ならぬ。

彼女は無邪気そのものであるから、一つ家に辿り着いた時、二人が武家風の出で立ちであるのを、老婆が見咎めても、さして気にも掛げず、「幼い時に別れたる——」身内を尋ねて来たのだと思わず口に出そうとする。その時伊駒之助は慌てて脇から引き取り、「時ならぬ高燈籠はお国の風か。但しお志の常夜燈か」と、氣転をきかせ話題を高燈籠に逸らし、逆に老婆から話を引き出すことをこころみる。

この時の老母の返事はまことにしおらしい。

「御尤ものお尋ね。此所は安達が原と申して。山なり原なり道の知れぬ街道。丁度お前方の様に道に迷うて難儀する人が多い故。あの様に燈籠を點し。往來の衆の助けにするも。先立たれし連合の未來の闇を照す明り。」

だが本当のところこの「高燈籠」は、路に迷った旅人を誘き寄せ
る囃（おとり）であることを、観客は知っている。この舞台では先
に商人ひとりが大金を狙われ、老婆に殺害されているからだ。奪つ
た金は勿論謀叛のための軍用金である。奥州六郡の司であった安倍
頼時の妻若手は、夫を亡ぼした八幡太郎義家と京都朝廷に復讐叛逆
を企て、奥州に新内裏を打ち立てる画策に腐心しているのである。
その意味では、「高燈籠」は、彼女にとってまさに「先立たれし連
合の未来の闇を照す明り。」であるのに違ひはない。

現在二本松市の安達原には、鬼女の住み家とされる巨石群、そこ
からわずか三百メートルくらい隔てた処に、鬼女を埋めたとされる
黒塚がある。巨石群があるのは観音寺の境内で、黒塚伝説はこの寺
の本尊である白真弓観音の、靈驗利生譚という形をとっているよう
だ。

寺が伝えるこれらの一連の物語は、現在見るところ全く別系統の
ものが継ぎ合わされた形で、はっきり二つの部分に分けることがで
きる。一つは謡曲「黒塚」（観世流では「安達原」と同工のもの、
つまり廻国行脚の僧熊野出身の東光坊が、安達原で行き暮れて宿を
借りる。主の老女は裏山に薪を取りに出る時、奥の一間の寢室を見
てはいけないと言ひ残すが、東光坊は禁忌を犯して見てしまう。そ
れは謡曲の詞章を借りれば、

「膿血忽ち融滌し、臭穢は満ちて膨脹し、膚膩ごとごとく爛壞せ
り。人の死骸は数しらず、軒とひとしく積み置きたり。」

と惨澹たる光景であった。いっ散に逃げる東光坊、出刃包丁（寺の
伝承、謡曲では鉄杖になっている）を逆手に持ち、後を追う老女の

形相は鬼と化していた。このとき謡曲のワキ、ツレ三人が口にする
呪文は「東方に降三世明王、南方の軍荼利夜叉明王——」に始まる
例の真言陀羅尼で、彼らは山伏修業の身であるから、これは当然と
いえる。

寺伝の方は如意輪観世音菩薩であり、東光坊が一心に祈念すれば
「佛身より眩はゆき大光明を発し、悪婆の五体に浴びせ掛け、同時
に携え玉へる白羽の破魔の真弓に金剛の矢を番え、雨の如くに射掛
け玉う」（観音寺発行の『白真弓観世音物語』）と、白真弓観世音菩
薩の利生譚を結末としている。

このように「安太多良」または「安達原」の地名と「真弓」は
深い関係があったらしく、『万葉集』にも

陸奥の安太多良ま弓弦著けて引かばか人の吾を言なきむ（七卷、
一三二九）

陸奥の安太多良真弓はじき置きて撥らしめきなば弦はかめかも
（一四卷、三三三七）
があり、

『拾遺和歌集』（一四卷）にも読人不知として

陸奥の安達原の白真弓心こはくも見ゆる君かな
がある。

その他「真弓」「檀」は非常に例が多く、早くから歌語に定着す
る兆を示すだけに、「鬼」や「黒塚」よりも、まずは「まゆみ」と
の関連性こそ、「安太多良」、「安達原」については問われるべきだ
と思うのだが、今の私にははっきりした答えは出せそうにない。

さて観音寺伝承のも一つの物語は、話の流れとしては東光坊の白

真弓観音の靈驗譚の、前半部に当る部分である。

公卿屋敷に奉公まもしていた乳母が、育てた姫君の病氣を治したい一心から、「妊婦の生肝なまきもを飲ませれば治る」との易者の言葉信じ、旅の若夫婦の妻が産気づいたのを殺してしまう。殺した後、それは幼時都で生き別れたまま行方が分らなくなっていた我が娘であることが分り、母親は気が狂い、鬼になったという話である。

母の名を岩手、若夫婦の名は伊駒之助・恋衣であるというから、これはもう全く『奥州安達原』四段目の「一つ家の段」と同工異曲、というより宝暦十二年大阪初演のこの作品が、安達原の黒塚に流れ着いたものと見做す他はないかと思う。

もっともこの不幸な母娘を、京都上流社会の出身者であるとするところに、

みちのくの安達原の黒塚に鬼こもれりときくはまことか

と、『大和物語』(五八)にもある、黒塚の女に送った平兼盛の歌の背景にあるような、零落貴族の女たちの悲しい情況や気分を、いく分反映していないとはいえない。あるいは半二が戯曲を書く以前に、貴族出身の女が鬼にならねばならなかった、何らかの素朴な伝承があったのかもしれないが、今はよく分らない。

とにかく現在の黒塚伝説の前半は、近松半二の戯曲の転化であることは間違いないように思われる。

半二劇には叛逆者を描くものが幾つかあるが、その描写方法には迫真性がこもり、優れた技量を示すものが多い。例えば『役行者大峰桜』の大友皇子、『天竺徳兵衛鏡』の天竺徳兵衛、『日高川入相花王』の藤原忠友と藤原純友、『太平記菊水之巻』の宇治常悦と鞠ヶ瀬秋夜(モデルは由井正雪と丸橋忠弥)などである。『奥州安達原』

はこれらの系列に属する早い時期の作品で、謡曲で知られた黒塚伝承の鬼に、前九年の役で京都朝廷に対立して敗北した、安倍一族を結合させたところに着想の秀逸さがある。謡曲『黒塚』の詞章に漂う零落した女の悲哀は、叛逆者の怨念と強力な意志、敵を欺く知力へと転化し、強い女を主人公とする伝奇的史劇となって完成するのである。

半二劇の特徴の一つに、作者の仕掛けるトリックの複雑さ、謎の多い筋立てということがあるが、この作品も例外ではない。それも過剰になれば煩雑になるのみで、半二劇の欠点に挙げる向きもあるが、謀叛劇、叛逆劇の特色の一つとして、浄瑠璃の場合詐術のせめぎ合いが趣向に持ち込まれることが多いから、彼の作劇法はこの分野では、長所として生かされる場合が多いのである。

奥州に新政権を打ち立てるには、衆人が納得する新政権の(主)が必要である。そのため京都の天皇の弟、環の宮が安倍一族の手により、秘密のうちに盗み出される。岩手は黒塚でこの宮を守護しつつ、叛逆の旗上げの準備をしているのであるが、環の宮はどういうわけか物を言えない難病を患っている。「胎内の児の血汐を用ひ」れば、この難病は治癒するという秘法を信じ、岩手は旅の宿りを求める恋絹を、我が娘とは知らずに殺害するのである。

彼女はすでに「高燈籠」を囮に、多くの人命を奪って来た。「見てはならぬ」禁制の闇は、その無惨な残骸の累積である。先に記したように、謡曲『黒塚』の表現はさらになまませいが、これらは肉体の自然をその生理のうちに内包する、女の負のイメージの極限を描いたものといえる。吉田御殿の千姫とだぶらせながら、近松門左衛門が『平家女護島』に描いた常盤も、男を闇へ導いて惨殺する

女である（これも平家打倒の手段ということになっている）。常盤は落中第一の美女であり、例え平氏の時代になっても、その妖艶なエロスは輝きを失わない。そのしたたかさに男は戦き、結果的にはなぶり殺されるのである。

盛りを過ぎた女の岩手には、常盤のような妖艶な美貌やエロスの輝きはないにもかかわらず、魔性のスケールは、女盛りの常盤よりはるかに大きいのはなぜだろう。それは失われた時間と共に喪失したものがあまりに大きく、その喪失感が耐え難い怨念や悔恨の情に摩り替わり、彼女の内面に鬱積しているからであろう。

失ったものの中核には、女の生命感の根源ともいえる若い肉体がある。岩手が自分の分身ともいえる、女盛りの娘の胎内から胎児を裂き取る行為は、話としてはあまりにもグロテスクにでき過ぎているが、こういう魔性を帯びた罪深い負の行為は、その大きさ深さという点で説明不可能な怨念や悔恨の、無意識裡における代償行為として説明する他はないであろう。恋絹の若さと自由奔放さこそ、老いた岩手が喪った最大のものであったからだ。

この場合へ殺した後で自分の娘と分り、衝撃の余り発狂し、鬼になつた」というのが、伝承や物語の理路であるが、実際はそうではないだろう。心は既に鬼になっていた、或はなりつつあったから殺したのであり、我が娘であったというのも結果論で、彼女は最初から我が分身を殺さなければならぬ運命にあった。つまり一度喪つたものを再度殺して、自分に復讐する他はなかつたのである。

こういう完結的な自虐性は、もとより狂気以外のなに物でもない。ところがこの狂人の意識は意外に醒めている。というのは彼女の自虐は外界への叛逆復讐という、二重の行為の上に成り立つ一連のもの

のであるからだ。上田秋成の描く「白峯」（『雨月物語』）の崇徳院が、修羅道の焰（ほむら）に我が肉体を炙りつつ、復讐を祈念するのと同類で、己れを苛みつつ（捨て身の犠牲の上に）、外側へ向うというあの構図である。

殺したのが娘と分つても

思はず知らず我が娘が君の病の薬となるは。手柄者とも果報とも此上のあるべきか。でかしたととてもなら誉めてやつて殺さうもの。何にも知らず死にをつたがたつた一つ残念な

とはまことに気丈そのもの。「げ実にも貞任宗任を産落したる骨柄なり」、「女に稀なる大丈夫」と、語りの「へ地」は鬼女への賞讃を惜しまない。近世の語りの潔い点はまさにこのところにある。

ところが彼女が叛逆の柱と頼む「環の宮」が、替え玉であればどういうことになるのか。事実彼女が「宮」と信じかかっていたのは、八幡太郎義家の一子八若丸であり、その「へにせ環の宮」に奉仕する女官匠の内侍も、義家の末弟新羅三郎義光の仮の姿であった。

これより前、安倍一族は皇位の象徴十握の宝剣も盗み出しており、その探索詮議のため、すべては知将八幡太郎義家がめぐらした策略であったというわけである。この最後のドンデン返しに、「さすがの岩手も驚きに、只茫然たるばかりなり」と、ここにはじめて鬼女の名「岩手」が語られることに注意する必要がある。（今年九月の国立劇場公演の折は、このくだりの語りは省略され、「岩手は無念の地団太踏み」の、たった一回、その名が出るのみであった）

完全敗北を認めざるを得ない、苛酷な現実と直面するとき、初めて本名が語られ、そして葬られる。というより葬り去るためにこそ、人間の名が付され、鬼は人間としての本性を現わすのだといえる。

鬼女岩手が全面敗北を認めざるを得なかった相手は、八幡太郎義家である。「陸奥話記」をはじめ、「古今著聞集」「今昔物語」「十訓抄」、『平家物語』（「剣の巻」下）などの史書や説話集に描かれる八幡太郎の人間像には、どれも共通したものがある。武勇と知力に秀で、優れた指導力を持ち、しかも恩情に篤く学問や文芸にもこころざしの深い、理想的武將像である。歴史を検証しても、前九年、後三年の役を通し、彼が東国方面に残した足跡が、その後源氏が武家の棟梁として東国を根拠に、全国を制覇する基盤となったことは否定できない。

こういう人物を浄瑠璃劇がとり上げれば、多くは「神」の次元に引き上げられ、劇中の精神世界は支配するが人間の個性を失い、葛藤の場には参加せず、背後に退く事が多い（例えば『義経千本桜』の義経）。義家の場合、並木宗輔の『安倍宗任松浦登』（元文二年豊竹座）では、特に宗任との関係でその「情」の面、つまり寛仁な人格が強調されているが、作者はそれ以上の作意を施すつもりはなかったようだ。

これに対し半二の『奥州安達原』には、義家の「へ知」の面が突出して描かれ、その「へ知」はドラマの全世界を支配し覆いつくす。この場合「へ知」とは敵を根底から欺く、計算され尽した詐術のことで、この作品は八幡太郎義家と安倍一族の詐術の技くらべの様相をおびているのである。合作体制をとる作品ではあるが、半二の好みや作劇方法にかなう構想を持ち、それが義家の「へ知」と「一つ家」の謎解きに集中していく。

安倍貞任は都の動勢を探るべく、桂中納言になり、大内を自由に出入りし、弟宗任は敵を欺くため南兵衛なる人物に身をやつし、叛

逆者の拠点である「一つ家」は、あらゆる仕掛けが隠される謎の家でもある。

安倍一族の命がけの策謀を察知し、それを上回る詐術を仕掛けるのが八幡太郎である。「一つ家の段」には義家は登場しないが、この場の主役はやはり義家であるとしか言いようがない。結局へ鬼は欺かれて亡びる」という、伝統的公式は、ここにも生かされているわけである。

すべての事が終わった後、「やあ〜生駒。老女の作れる罪科も高燈籠の光にあり。其火を消すは汝が手向」と、新羅三郎の声が掛かり、伊駒之助が松の立木を切り倒せば、灯籠の灯は消え、同時に数万の軍勢が姿を現わす。高燈籠は叛逆者安倍一族の、とりわけ鬼女の岩手が管理する、拳兵相図の狼煙なのであった。しかし全ては後の祭りである。策謀に破れ、母を失った安倍兄弟は決戦を躊躇し、軍勢は源氏方に懐柔される。鬼女の想いの籠る高燈籠は消え去り、全てが徒勞に帰したことが明らかなるとき、最後に高燈籠の秘密の仕掛けが種明かしされることで、鬼女の執念の激しさのみは、歴然と残るのである。

今日の舞台がこの部分をカットするのは、勝敗が決した後でのごどさを、避ける必要からと思われる。今日の事情からは止むを得ないところもあるが、「物」に託して人間の内面を表現する、象徴的意味の追及とその徹底化には、絶対に手抜きをしない古典劇の作法を思わせるのが、この鬼女の高燈籠である。辺境の叛逆者は中心部から見れば、「悪」であり「鬼」である。追いやられた「悪」「鬼」を舞台に呼び戻し、再現する手法は、この作品だけでも、一つや二つにとどまらないが紙幅が尽きたので、他の機会に譲りたい。